

梅内美華子氏（歌人）、渡邊新月氏（歌人）が来館されました。

若手歌人の登竜門として最も権威のある新人賞・角川短歌賞を受賞し、企画展にも協力・寄稿いただいた青森県ゆかりの歌人である梅内美華子氏と渡邊新月氏が、8月にそれぞれ来館した。

梅内氏は八戸市生まれ。俵万智の歌に影響を受けた後、馬場あき子に師事し、平成3年、「横断歩道」50首により第37回角川短歌賞を受賞。6冊の歌集を出版し、現在は歌誌『かりん』選者、編集委員を務める。企画展では、自身の歌集と寺山修司に関する寄稿のほか、寺山の第一歌集『空には本』20首抄を担当した。

梅内氏は中学生の時、初めて寺山の短歌に触れ、「ポエムのようにみずみずしく、文学の方面に誘う短歌があることに驚いた」という。また、「調べが良く、滑らかで、口に乗せて歌いたくなるようなリズムを持っている」と、色褪せない寺山作品の魅力を語った。

その後、新しい短歌に向かう青森県歌壇黎明期の変遷についても見学。寺山をはじめとし、昭和から令和にかけて各時代で青森県歌人が実績を残していることを、「(県歌壇の)珍しい点かもしれない」と指摘した。



渡邊氏は八戸市に生まれ、茨城県に育つ。令和5年、東京大学在学中に「楚樹」50首により第69回角川短歌賞を受賞。現在、「歌林の会」に所属し、精力的に作歌・投歌をしながら、東京大学大学院で新古今和歌集を中心に研究を進めている。

2年ぶり2度目の訪問となった今回は、企画研究専門員の案内で企画展を鑑賞。寺山の第一歌集『空には本』の表紙や線描、楽譜について「チャレンジングな歌集で、新しい文章をつくろうという気概にあふれている」と、その強い印象を語った。

自身については、青森県に「憧れや愛着がずっとある」と話し、雪の歌が多いことを指摘された折には、「無意識に雪に愛着するものがあるのかもしれない」と分析。角川短歌賞受賞作と同等の歌をいくつか作っていく上で、やがては「20代で第一歌集を出すこと」を目標に掲げた。

企画展では「縦走砂丘」

(昭和47年)で第18回

角川短歌賞を受賞した中村雅之氏（筆名・江流馬三郎）を両氏とともに取り上げ、色紙、自選短歌などを紹介している。

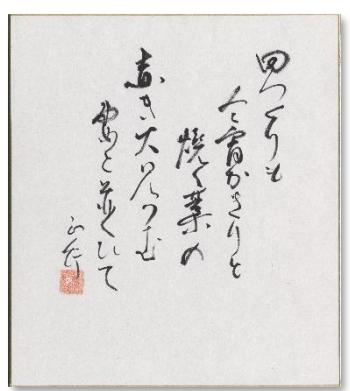


次回スポット企画展 新収蔵資料展 一中村雅之旧蔵資料を中心

中村雅之（本名・正行）は、昭和3年に津軽半島の寒村・車力村（現・つがる市）に生まれた。早くから農業にいそしみ、土とともに暮らしてきた日々が歌の根底にある。昭和47年、江流馬三郎の筆名で発表した「縦走砂丘」50首により、本県初の角川短歌賞を受賞。かけがえのない風土と人生を歌い続けた生涯だった。

本展は、令和7年2月に他界した歌人・中村雅之旧蔵の直筆資料を中心に展示し、その知られざる一面を紹介するものである。

会期：令和7年12月10日～令和8年2月23日（年末休館：12月29日～1月3日）



中村雅之色紙

「田づくりも今宵かきりと焼く藁の

赤き火見つむ妻と並ひて

正行」

お知らせ

新春〈ラウンジのひととき〉

令和8年1月10日（土）午後2時～午後3時

「平尾鶴朋 薩摩琵琶を弾き、語る」－「夕鶴」「山椒大夫」
出演：平尾 鶴朋氏（薩摩琵琶 鶴田流演奏者・錦風流尺八演奏者）

〈文学忌〉

忌日を含む1週間程度ロビー展示を行います。
忌日は無料開館、午前10時より朗読があります。

令和8年3月1日（日）今官一

新春〈北の文脈文学講座〉

令和8年1月17日（土）午後2時～午後3時

「寺山修司の俳句・短歌・詩をつらぬく詩情」
講師：藤田 晴央氏（詩人）

〈休館日〉

○年末年始の休館日
令和7年12月29日～令和8年1月3日
○展示替えのための休館日
令和8年3月22日～3月31日

北の文脈ニュース 第93号

Kitano bunmyaku news

第49回企画展「生誕90年 寺山修司ー放たれた歌」記念講演会

令和7年10月11日（土）弘前プラザホテル

共催：弘前ベンクラブ（創立30周年記念）

「寺山修司と郷土青森」

講師：福島 泰樹 氏（歌人）

講師プロフィール

1943年東京に生まれる。早大卒、69年歌集『バリケード・一九六六年二月』でデビュー、以後「短歌絶叫コンサート」を創出。84年5月、寺山修司一周忌の靈前に追悼歌集『望郷』（思潮社）を献じ、追悼コンサート「望郷」を開催。86年、世界50ヶ国の詩人と朗誦を競い「第6回ブルガリア国際作家会議コンクール詩人賞」を受賞。以後、アメリカ政府、ドイツ政府、ネール大学などの招喚を受け国内外1900ステージをごなす。『福島泰樹全歌集』（河出書房新社）、『追憶の風景』（晶文社）、『寺山修司 死と生の履歴書』（彩流社）、絶叫版DVD『遙かなる友へ』（クエスト）等著作多数。

第49回企画展「生誕90年 寺山修司ー放たれた歌」の記念講演会が弘前プラザホテルで開催された。講師は寺山修司とも親交があった歌人の福島泰樹氏。

福島氏が寺山修司と初めて会ったのは昭和44年、第一歌集を出版したばかりの26歳の頃。寺山は天井棧敷を旗揚げし、活躍の場を世界に広げはじめていた33歳だった。この日、福島氏は早稲田祭で寺山の講演の前座をつとめた。「(寺山が『バリケード・一九六六年二月』を)ポケットからわざわざ持ってきたのを出して、褒めてくれた。嬉しかった」と、当時の思い出を懐かしそうに語る。以来、昭和58年に寺山が没するまで親交は続き、福島氏が解説を任せられた『寺山修司歌集』（国文社）への寄稿が寺山の最晩年の仕事となった。

昭和10年、寺山修司は、父・八郎、母・はつの長男として弘前市紺屋町に生まれた。警察官であった八郎の転勤により転居を繰り返し、昭和20年、青森大空襲で焼け出されて三沢に移住。同年、出征していた八郎がセレベス島で戦病死する。米軍基地で働くはつは家を空けることが多くなり、寺山少年は複雑な思いを抱えたまま成長する。この頃から詩・俳句・短歌を書きはじめ、昭和24年入学の野脇中学校では文芸部に入部、学級新聞への出稿も積極的に行うようになる。エディター（編集者）とオルガナイザー（組織者）としての才能を見せると同時に、「白痴」や「片目」といった、後の天井棧敷と繋がる世界観が作品に現れはじめめる。

福島氏は、「実際に起こらなかったことも歴史のうち」という寺山の思想に注目する。例えば自伝的創作「螢火抄」の中で、一匹の螢を捕まえた「私」が、母親に螢を見せるのを諦め、机の引き出しに閉じこめるというエピソードがある。その夜、火事で家が全焼し、「私」は「あの火事は机の抽出しに閉じこめておいた螢の火が原因なのだ」と信じるようになる。また、自伝『誰か故郷を想はざる』では、小学校の同級生・戸村義子との離別が美しく綴られているが、実際に寺山が入学した橋本国民小学校は空襲で焼けている。戦争をはじめとした不条理を抱える寺山は、せめて想像の世界において、自分自身の過去を修正せざるを得なかつたのである。

寺山は詩・俳句・短歌・演劇・映画・ラジオなど、幅広い分野で「寺山修司」というジャンルを確立していくが、「それらの原型はすべて青森県にある」と福島氏は指摘する。具体的には、『森駆けてほてりたるわが頬をうずめむとするに紫陽花くらし』（『空には本』）などの短歌は、少年期に過ごした古間木（三沢市）の舞台を西洋風に脚色したものであり、あるいは、『赤き肉吊せし冬のガラス戸に葬列の一人としてわれうつる』（『空には本』）、『大工町寺町米町仏町老母買ふ町あらずやつばめよ』（『田園に死す』）などは、青森県の原風景もしくは具体的な地名をそのまま、虚構化された世界に自身を投影している。福島氏は、「彼は過去を修正しながら、実際の自分と虚構化された自分の両方を生きてきた。それが合体した場所が弘前であり、古間木である」と強調。

「青森での生活がすべての寺山修司を育んだ」と締めくくった。

講演後は「短歌絶叫コンサート」として「戦士の休息」「別離」などを朗読、力強い表現と圧巻のパフォーマンスで寺山を追悼した。

当日は約100名が参加し、「寺山の実際を知る、福島さんの言葉は非常に深みがあり面白かった」といった感想のほか、短歌絶叫コンサートに感激する声が多く寄せられた。



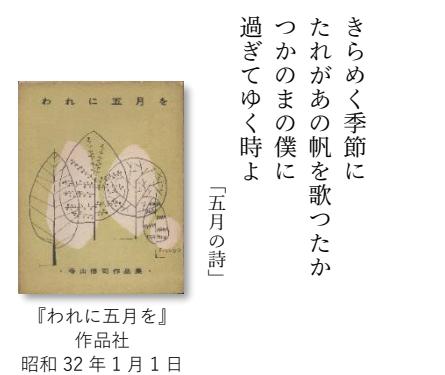
スポット企画展
生誕90年 寺山修司著作展

令和7(2025)年に生誕90年を迎える寺山修司は、俳句・短歌・詩・映画・演劇など多くのジャンルを駆け抜け、47歳で世を去るまで常に前衛であり続けた。寺山の多彩な著作やそこに記された印象的なフレーズを展示し、その魅力を紹介した。

寺山はエッセイ「墓場まで何マイル?」に「私は肝硬変で死ぬだろう。そのことだけは、はっきりしている。だが、だからと言って墓は建てて欲しくない。私の墓は、私のことばであれば、充分。」と記した。

寺山が残した言葉は世代を越えて、人々を魅了し続けている。

会期: 令和7年7月9日~令和7年9月25日



スポット企画展
追悼・福井緑展

福井緑は、昭和6(1931)年、大鰐町に生まれた。34年、生涯の師と仰ぐ宮格二の「コスモス」に入会し、41年には同人に。格二死後の63年には、島田修二の「青藍」に参加し活躍した。福井は津軽に根を張り、52年に結社を超えた津軽女流短歌の会「火の会」を結成し、平成3年に同人誌『真朱』を主宰。11年には青森県歌人懇話会の第三代会長に就任するなど、本県歌壇の振興と後進の育成に努めた。歌集は『邊隈詠』『無象の塔』など7冊、ほかに随筆集2冊を刊行した。

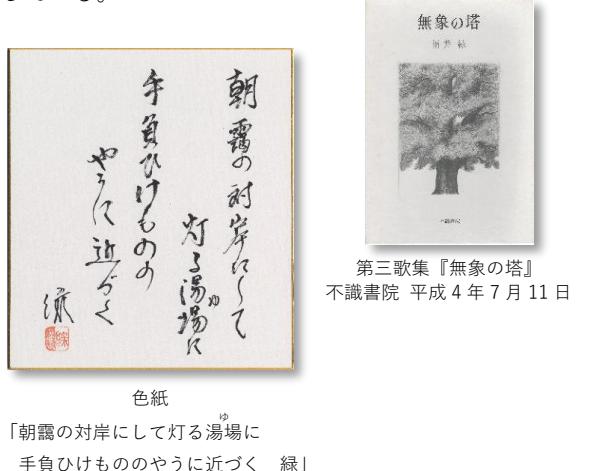
第一歌集『邊隈詠』のタイトルは師である宮格二が命名したもので、福井は「宮先生が命名して下さった『邊隈詠』とは私の生きる津軽にぴったりの標題だったのでした。ここで産れ、この地で果てるのを運命と思う一人の墓守り女にとって、はたしてこの魔力に満ちた韻律は使いこなせるものだろうか」と迷いました。(『無象の塔』後記)と記している。

また、福井と中村キネが結成した超結社・津軽女流短歌の会「火の会」は会員を増やし、「津軽と言うわれわれの立脚点を見失うことなく、そこで先ず出来ることに手をつける、そんな気持ちで始めた会である」とあるように、津軽を中心に吟行を重ね研鑽を積み、会を存続。「この小さな詩形を愛し、その器にふるさとを盛り込むことに腐心した」(合同歌集『伏流水』後記)とも記している。また、福井は、吟行の楽しみを「創作の苦しみを伴った——それが逆に刺激となり、薬味となつた——楽しみなのである」と記し、それが「火の会」が9年も続いている要因の一つだとしている。

本展は、各歌集より15首を抜粋、展示し、令和5年9月に92歳で逝去了した福井緑を追悼、そのすぐれた歌業を紹介するものである。

やつれの美さがして亡母の紬着る大正の紅絹うすくやはきを 『津軽の柵』より

会期: 令和7年9月27日~令和7年12月8日



文学散步 寺山修司生誕の地・弘前を歩く 講師: 世良啓氏(文筆家)

今回の文学散步は、長年、寺山を研究している世良啓氏を講師に迎え、「寺山修司はなぜ弘前に生まれたのか。その謎を寺山修司の父・八郎や弘前の歴史とともにひもとく」をテーマに、弘前公園、紺屋町周辺を時折小雨が降る新緑のなか、寺山のエピソードを聞きながら巡った。

寺山の父・八郎は、警察官で秩父宮の警護のために弘前に勤務し、紺屋町に住んでいた。そこで寺山が誕生、弘前で過ごしたのち父の転勤により県内各地転居を繰り返した。その紺屋町では、生誕地、秩父宮の御仮邸(旧菊池別邸)、紺屋町臨時派出所などを見学、秩父宮警護にあたった八郎についての解説を聞いた。

また、寺山の生後6か月頃の家族写真を撮影したと思われる弘前公園春陽橋付近で集合写真を撮り、文学散步の記念の1枚となった。

参加者からは、「見慣れた弘前の意外な面を知ることができて楽しかった」「父・八郎、母・はつのこと、弘前とのかかわり、新たな知識を得て楽しい時間でした」などの声がきかれた。

令和7年5月10日(土)



開館記念イベント
無料開館

令和7年6月28日(土)、6月29日(日)、7月1日(火)

弘前市立郷土文学館の開館日(平成2年7月1日)を記念して、各種イベントを開催。6月29日は「読んで詠む 短歌づくりワークショップ」が、講師に片岡美有季氏(弘前大学人文社会科学部助教)、帆苅基生氏(弘前大学教育学部助教)の両氏を迎えて行われた。

またロビーでは「寺山修司と写真を撮ろう!」「短歌パズルであそぼう」や毎年恒例の「郷土文学館オリジナルクイズラリー」「歴代企画展記念スタンプ展」といった、どなたでも参加できるコーナーを設けた。



短歌づくりのためのヒントなどの講義からスタート

思い思いにできあがった短歌を読み合う参加者の皆さん

ラウンジのひととき

令和7年9月6日(土)

歌に私は泣くだろう

妻・河野裕子 閩病の十年 永田和宏

出演:語る会

歌人・永田和宏の妻であり、戦後を代表する女流歌人・河野裕子は、突然、乳がんの宣告を受けた。壮絶な闘病生活と、歌人一家の愛と絆。発病から最期の日まで、二人の歌人は歌を詠み続けた。永田による著書『歌に私は泣くだろう—妻・河野裕子 閩病の十年—』より、五所川原市オルテンシアで行われた感動の朗読が、二年の時を経て再演された。申込開始初日より申込が殺到し、急遽、会場を弘前図書館視聴覚室に変更しての公演となった。



北の文脈文学講座

令和7年9月20日(土)

私の寺山修司の実践

-小中学生へ

講師: 中里茉莉子氏(歌人)

青森県歌人懇話会会長の中里氏は三沢市立第一中学校に赴任し文芸部を立ち上げ、「寺山修司の短歌を読もう」という目標を掲げた。生徒たちは朗読、暗唱を通して生き生きとし、仲間意識が芽生え、お互いを思いやる気持ちが育まれた。さらに生徒たちは自ら短歌を詠むようになる。

講座では寺山の短歌や小中学生の短歌を詠み、「15歳の気持ち」を取り戻した受講者が即興で短歌を1人1首ずつ発表した。

